
短編集02【T e r r o r－T e l l e r】

高岡たかを

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集02【Terror-Teller】

【Nコード】

N2896T

【作者名】

高岡たかを

【あらすじ】

ホラー系過去作品短編集

ひとつ屋根の下で

「ただいま」

私は小さな声で告げると、暗いリビングのスイッチを探りながら、空いた手でネクタイを緩める。

明かりのついた室内。壁掛け時計の針は午後十一時を回ろうとしていた。

ダイニングのテーブルには、夕食の皿がラップにかけられている。それらを電子レンジに放り込み、熱を通すと、私は黙々と一人きりの夕食を取り始めた。

私の目は、自然とテーブルの向こう、締め切られたドアの方へと向いていた。

あのドアの向こうには妻がいて、今頃は私が帰ってきた事も知らずに眠っているのだろう。

不意に私は箸を止めた。

一体、いつからこんな生活をしていたのだったか。

きっかけは、些細な口論だった。

妻に口では到底かなわない私は、早々に言い合うのを止めて無視無言を決め込んだ。

それが彼女の癪に障ったらしい。

彼女は、元々は二人の寝室だった部屋から私の荷物を全てリビングへと放り投げ、その部屋に閉じこもってしまった。

妻は私の呼びかけに一切応じようとしなかった。

その時になり、私はようやく自分のとった態度がいかに彼女を傷つけてしまったかに気づき、ひどく後悔した。

どれほど謝罪の言葉を述べても、閉じ切られたドアが開く事は無かった。

力ずくでドアを開ける事も考えたが、その行動はより一層深く妻を傷つけてしまうだろう。

私は自然にドアが開くのを待つしかなかった。

数日が過ぎた時だった。

私が仕事を終え帰宅すると、ダイニングのテーブルにはラップがかけられた夕食が用意されていた。

私は喜んだ。私が家にいない間であったが、妻がほんの少しだけドアを開いてくれたのだ。

久しぶりに食べた妻の料理はうまかった。

それから新しい私たちの生活が始まった。

結婚前に二人で決めたお互いの分担をただ忠実に守り、こなすだけ。

一切の顔を合わせず。

一言も会話を交わさずに。

確かにそれは夫婦の生活としては奇妙なものだっただろう。

仮面夫婦というのも違う。家庭内別居というにも、近いが遠い意味を感じた。

そんな生活が二日過ぎ、三日が過ぎ、一週間となる前に、まるで初めから両者の関係がそうであったかのように、私は自分でも驚くほど自然にこの生活を受け入れていたのだ。

何故か食が進まず、私は妻の作ってくれた夕食を半分以上生ゴミとして扱わなければならなかった。

少くない後ろめたさを感じつつ、私と妻とを隔てるドアの前に立つと、私は静かに言った。

「ごちそうさま。おやすみ」

返事はなかった。

それから数日後。

私は食欲の不振に悩んでいた。

残された夕食を目にしたら妻はきつと悲しむだろう。

私は妻を悲しませないためにも、無理に食事をとろうとしたが、箸を運ぶそのたびに嘔吐感がこみ上げ、食べ物を口に入れても、中々喉を通らなかった。

結局、大半を残してしまった。

こんな日々が続いている。

使った食器を片づけていると、私はキッチンに卓上カレンダーがある事に初めて気がついた。

そのカレンダーは私と妻が奇妙な生活を始めた月から日付が進んでいなかった。

私はペラペラと何枚かページをめくり、今月に合わせてやる。

と、今日から数えて一週間後に、ピンクの蛍光ペンで文字が書かれていた。

妻の丸っこい字で、

『三回目の結婚記念日』

私は、自分の迂闊さを呪った。

ずっとキッチンにあった卓上カレンダーに気がつかなかった事もあるが、私は自分たちの結婚記念日さえ忘れてしまっていたのだ。

意を決し、私は妻のいる部屋の前に立つ。

ドア越しの妻へ。

「来週は僕たちの結婚記念日だったね。どうだろう？ 久しぶりに顔を合わせて話さないか？ キミは僕の顔なんか見たくないかもしれないし、話す事なんか無いかもしれないけど、僕はキミの顔を見

て話がしたいんだ」

やはり返事はなかった。

次の日。私は会社で警察からの電話を受けた。

その内容は唐突過ぎて、とうてい信じることが出来ない内容だった。

妻が、死んだ。

いや。正確には妻は『死んでいた』。

電話を受けてから数時間後。私は遺族ではなく容疑者として警察署の取調室にいた。

私は刑事に色々と訊かれ、また色々と聞かされた。

近隣の住民が数日前から腐敗臭のような異臭を感じており、最近妻を見かけない事を不審に思い警察に通報したそうだ。

大家と警官が踏み込んだ時、妻はすでに死んでいた。

刑事は細い目で静かに私の表情を窺いながら、

「それでは旦那さん。あなたは奥さんが昨夜まで確実に『生きていた』と、そうおっしゃる訳ですね？」

それは何度も受けた質問で、何度も答えたはずだ。

「はい。妻は昨日の夜、夕食の支度をしてくれました」

「だから旦那さん。それがもうおかしいですよ。先ほど、遺体解剖の結果が出ましてね。奥さんの死体はだいぶ腐敗が進行しており、一部が白骨化してました。死後三週間だという事です。ひとつ屋根

の下にいて、あなたが気がつかないはずないでしょう？」

死後三週間？

私は凍りついた。

三週間、前。

それは、妻が夕食を作ってくれるようになった時期と重ならないだろうか。

そう言えば、何故私は箸を止めたのだろう。

何故食欲がわかなかったのか。

家中に、ドア一枚では抑えきれない腐臭が充満していたからではないのか？

「どうしました？ 旦那さん？ 顔色が」

刑事の声は遠すぎてよく聞き取れなかった。

私は、一体いつから腐臭がするようになったのか思い出そうとした。

しかし、どれほど懸命に記憶を辿っても、思い出す事が出来なかった。

—
e n d.

ひとつ屋根の下で（後書き）

2007年ごろに書いた作品です。

コンセプトは、

『詳細を多く語らず、読者の見方一つでどうとでもとれるホラー』

今読み返すと、漠然とさせるならさせるで、もう少し広げて作れば良かったですね。

すき間の話

怖い話？ ああ、それなら一つあるわ。実際にオレが体験した話。ウソじゃねーって。作ってねーって。マジもんマジもん。

あのな。お前がここに来る前の話な。

お客さんの中に、『○○商会』ってお客さんがおってな。

森本の山んとこ行った先にあったがいけど、その社長が大分年やったし、誰も後継ぐもんおらんし、店閉める事にした訳よ。

んで、在庫しとった商品とか、使えそうなもんタダでくれるって言うから、Nさんって人と——まあ、今辞めてしもておらんげんけどさ、その人とオレの二人でトラック乗って引き揚げに行ってんぜ。その倉庫って言うのがさ、店から少し離れた所にあってな。民家改造して倉庫みたいながにしてあったげんけど、オレらカギ貸してもらって引き揚げに行ってん。

周り田んぼやったし、倉庫の前とか横とか庭になっとるし丁度よかったからトラック前に付けて中入ったんよ。

民家改造してある言うても、ぶち抜きになっとる訳でもないし、ほとんど家そのまんまやったわ。

そう。ふすまとかタタミ外してあるだけって感じ。元々は社長らち住んどったげんと。

そんでな。Nさんと二人して一度中さつと見て回ったがいけど、Nさんは何ていうか霊感的な何か持つとる人でな。

奥の部屋入った時に急に「あかんわ」って言ってん。

オレが笑って「またですか？ 勘弁して下さいよ」って言ったがいけど、真剣な感じで、「そこにある押入れの戸、見たらあかんよ」って言うげん。

そんな事言われたら、「え？ どれ？」って見てしまうやん。なあ？

ボロボロになつとる押入れの戸が十センチくらい開いとつたわ。そう。そや。そやな。

他の部屋の戸は全部とっぱらつてあつたけど、その部屋の押入れだけは戸がついとつたわ。

なんか仏間みたいやつた。

オレ見てしまったから、押入れ中一回見て、中に何も無いが確認して閉めた。

ちよつと建付け悪かつたけど、ちゃんと閉まつた。

オレが「大丈夫つすよ」って言つたら、Nさん何か言いたそうやつたけど、何も言わんだわ。

それで引き揚げ作業始めてさ。三時間くらいかかったんやつたかな。

終わつた時夕方になつとつたわ。

戸じまり確認して、鍵掛けたらさ、小便したくなつたし、家の横に回り込んだがいぜ。

んで、Nさんと二人して田んぼに向かつて小便しとつたらさ、ふと氣になつて終わつたら家の方見た。

そしたらさ。窓開いとんげん。

別に暑くもなかったから窓開けとらん。換気しようとも思わんかつたオレは。つうか、横回つた時は閉まつてなかつたか？

Nさんに「窓開けました？」って聞いたら、「なん開けとらん」って言うからNさんでもない。

Nさんビビつてダダこねるから、オレが閉めに行くしかなかった。一回掛けた鍵外して中入りながら、最初からあの窓は開いとつたんやつて思った。閉まつとつたがも見間違いやつたがいろいろ思った。

開いとる窓は台所の窓やつた。

オレは窓閉めて鍵掛けて戻ろうとした。

別に氣になつた訳でもないし、見ようと思つて見た訳でもない。台所の隣の部屋は、Nさんが「あかん」って言つたあの仏間やつ

た。

その押入れの戸が少し開いとった。
ホンマにビックリした時って悲鳴ちゃ出んがの。息止まんがの。
オレでも分かったわ。

「ああ、あかんわ」って。

走って家出て、玄関の鍵掛けてトラック乗ったわ。

社長に鍵返してないが気づいたが会社帰って一服してからやったわ。

車ん中でもNさんと一言もしゃべらんかったし。

これが、オレが体験した話な。

アレは多分、マジもんやと思う。

――了

すき間の話（後書き）

2009年9月頃に書いた作品。

先輩がおススメの怪談本を読んでみて、

「別にどうってことない事を書いてみよう」と思って書き始めた気がします。

が、途中でどうでもよくなって、「完全に方言でやる」「休憩時間に誰かと雑談してる感じ」の二つだけが支えになりました。

作中の方言は、北陸地方のものを使用しています。

おそらく、北陸以外にお住まいの方には読み辛くて仕方ないと思います。

申し訳ありません。

知らない人

ワシが九才か十才くらいの時の話やから、六十年くらい前の話やな。

ワシの親父の実家が鶴来の山の方にあつてな。

夏休みに三つ下の弟とワシの二人でその家に遊びに行く事になった。

親父は勤めがあつたし、後で母親と一緒に来る段取りになつた。

ジイさんは戦争で死んでしもとつたから、バアさんしかおらんかった。

その日の夕方、近所の寺の住職が、子供らち集めて怖い話をする言うから、ワシは弟の手を引いてバアさんと寺まで怪談を聞きに行った。

バアさんは、ワシと弟に「こんなん聞いて、夜中便所行けんくなくとも知らんぞ」言うとつた。

家帰ってきて夜中の話や。

ワシは、なんやらゴワゴワした布団で中々寝付けんかった。

そしたらの。弟が横まで這いずって来て、「兄ちゃん、便所行きたい」言う。

「ほやから、怖い話なんか聞いたらあかん言うたろ」とワシは弟に言うたが、正味な話、ワシも便所に行くのが怖かった。

お前らは知らんやろうが、昔の古い家いうがは、今とちごて便所が外に有るがが普通やつた。

弟は何度も「兄ちゃん兄ちゃん」言うて、ワシの寝巻きを引っ張ったが、ワシは弟にゴロンと背中向けて「知らん。一人で行けま」言うた。

しばらくして静かになった。

朝になって、朝飯の前に弟に「便所一人で行ったがいなあ」言うたら、弟はケロッとした顔で、「なん。知らんオツチャンに連れてってもろた」言うた。

親父と母親はまだ来とらんだし、ワシと弟とバアさんしかこの家にはおらんかった。

ワシは何やら恐ろしくなって、弟の言った「知らんオツチャン」について聞けなんだよ。

――了

知らない人（後書き）

09年9月ごろ『すき間の話』を書いた後、少し時間があり、

「なら、もう一本やってみるか」

と思って書いた作品です。

コンセプトは『すき間』と同じですが、イメージ的には『仕事の休憩中に先輩が『すき間の話』をしてたら、定年間近の上司が「怖い話ならワシもあるぞ」とのってきた』という、面倒くさいイメージ。オチがないのは『すき間』と同じなのですが、文量の少なさが気に入っています。

亡霊トンネルの怪

思ったより遅くなっちゃったね。

わー。もうこんな時間。日付変わっちゃったね。

はいはい。あたしのせいですよ。

分かってますって。

ねえ。近道しようよ。早く帰れる道知ってるから。

次のね、うん。信号とかないから気をつけて。次の看板を左折して、道なり。うん。そうそう。

詳しいっしょ。あたし高校この近くだったから。

何でも聞いて。

……うあ。真っ暗だ。

ハイビームにしようよ。なんか怖いし。大丈夫だって。対向車とか滅多に来ないし。て言うか、車自体全然走らないんじゃないかな。うん。

あ。

え？ どうしたって？

うん。ちよつとねー。高校の先輩から聞いた話思い出しちゃった。ちよつと怖い話。

聞く？ 聞きたい？

いやだー。もう話したくなっちゃったもん。

聞けよー。聞いてよー。

あのね。あたしが高校の時、先輩から聞いた話なんだけど。そうそう。先輩も他の先輩から聞いた話なんだって。

けっこう昔の話みたい。

あのね、この近くにさ、『亡霊トンネル』って呼ばれてるトンネルがあるんだって。

うん。どこにあるかまで、あたしは知らないよ。うっさいなあ。

そこまで何でもは知らないよ。

なんか、地元の人しか知らない小さいトンネルらしいよ。

元々防空壕だったって話。それだけで普通に怖くね？ あは。ビビりすぎ。

それでね。

とある部活の生徒がさあ——知らねえよ。何部だったかなんてさ。細かいとこ気にし過ぎ！

はいはい。じゃあ、バレエ部ね。バレエ部に決定。

バレエ部が合宿してたらしいんだけどさあ、夜中に肝試しに行こうって話になったんだって。

……知らないよ。ヒマだったんじゃない？

で、三人で行ったんだって。

そう。その『亡霊トンネル』。

うん。なんか事故が多くてそう言われるようになったみたい。でもさあ、こんなに暗かったら、普通に事故りそうじゃない？

でさ、そのトンネルに入ってさ。最初は何も無かったんだって。

……どうしたの？ 急に黙っちゃって。

ビビった？

あ、今の一旦停止だったよ。

何も無くて、やっぱりただのウワサかあってなって、帰ろうとしたらしいんだけど、一人が気づいたんだって。

影がさ。

影がね。四人分あったんだって。

一人多いの。

ずっとついてくるの。その誰だか分かんない影が。

三人は慌ててトンネルを出たらしいんだけど、それでもずっとついてくるの。

しかも、最初小さかった影が、だんだん大きくなってくるんだって。近づいてきてるの。

その誰のだか分かんない影がさ、バーって手を広げて三人の首を

一人ずつ締めていったんだって。

その後、三人は意識不明になったらしいよ。
それから、面白半分でそのトンネル通ると、呪われて死んじゃうんだって。

……ねえ。さっきからどうしたの？ 黙ってさ。

あ。トンネル。

……………。

……………。

あは。ねえ、今のトンネルが『亡霊トンネル』だったりして。

……なんか言えよ。

ねえ、ちょっと。ねえってば。

ちゃんと聞いている？

……え、ウソ。今、信号赤だったよ。

……スピード出し過ぎじゃない？

ねえ。ねえ！

ちょ！ おい！ 止めて止めて！ ブレーキ！ 前前前！

とめとめとめとめっ——止め——っ——……………

——了

亡霊トンネルの怪（後書き）

元は03年ごろ書いた作品です。

原本の内容があまりにも稚拙だったため、

「もうやり直したほうが良いかも」

と、今回大幅に書き直し。まるで違う作品になってしまいました。

The end of world

世界と少女を天秤にかけた。

ボクはどこにでもいる普通の大学生で。

少女は壊れかけたこの世界を救える唯一の存在で。

世界を救うためには少女の命が必要らしい。

世界中のみんなが少女の犠牲を望んでいる。

だけどボクは彼女を愛していて。

彼女もボクを愛してくれた。

ボクと少女は手を取り合って逃げた。

もうボくらには安住の地は無いことも。

世界中のすべてが敵に回ることも。

知っていた。

愛し合う二人の前には色んな困難が待ち受けていたけれど、ボクらはそのことごとくを乗り越えた。

逃避行を続けるうち、ついに世界が滅びる日が来た。

地球最後の日だ。

ボクと少女は立ち寄った町で、小さなスーパーマーケットに入った。

電気の消えたスーパーの中に従業員はいなかったけれど、ボクらは事務所にあったテレビを三番レジの上に乗せて電気を点けた。

地球最後の日だと言うのに、テレビ関係者は真面目に仕事をしていた。

素直にエライな、と思った。

チャンネルを回し、いつも見ているニュース番組に合わせる。

見慣れたニュースキャスターが、ヤケクソ気味にニュースを読んでいた。

会いたい人もいるだろうに。

一緒にいたい人もいただろうに。

それなのにこの人たちは、自分の仕事を優先したのだ。
最後まで誇りを貫いたのだ。

尊敬に値する。

生まれ変わったらテレビ関係で働く人になりたい、と本気で思った。

カウントダウンが始まった。

大晦日みたいだ。

ある意味間違っちゃいないのだけど。

カウントがゼロになれば、人類の歴史が終わるんだ。
人が築いてきたもの、その全てが失われる。

「私のせいかな」

隣にいた少女が、テレビから目を離さずにポツリと言った。

ボクは少女の肩をやさしく抱き寄せる。

「キミのせいじゃないさ」

本気じゃない、齒の浮くようなセリフが出てきた。

「キミが死ななければ救われない世界なんて、無い方がマシだ。ボクらは正しい事をしたんだ」

そうだろうか。

ボクらは正しい選択をしたのだろうか。

もしも彼女が犠牲となっていたら。

今、人類最後のテレビ放送を行っている人たちは、今日も普段と変わらずに、事件のレポートとか、新作映画情報紹介とか、グルメレポートとかしていたのではないのか。

仕事が終われば普段と変わらずに、少し疲れた顔して家路についていたのではないのか。

少女の肩を強く抱きしめる。
今更だ。

ボクは少女の手を握り、逃げる事を選んでしまった。
もう戻れないところまで来てしまった。
カウントダウンが終わろうとしている。

終われば、世界は滅びる。

「――世界なんて滅びてしまえ」

誰に言ったのでもない、独り言。

でも。

多分。

少女を慰めるために言ったセリフよりも。

こっちの方が数段マシンなセリフだったんじゃないかな。

――カウントダウンが終わる。

l d e n d

――W o r

The end of world (後書き)

記憶がさだかでないのですが、おそらく03年から04年ごろに書いた作品ではないかと。

作った時期は不確かなのですが、書こうと思った経緯はよく覚えています。

私が、大学で文芸サークルに所属していた頃、世はまさに『セカイ系』ブームでした。

そんな『セカイ系』に反発を覚え、

「なら、オレは世界を滅ぼすどうしようもない話を書こう」と言い出したのが始まりです。

「他人が何冊も使って世界を救うなら、こっちは原稿用紙四枚で世界を滅ぼしてみる」

そんなどうしようもないコンセプトでこの作品は生まれました。

救い難いですね。当時の私が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896t/>

短編集02【Terror-Teller】

2011年5月15日15時10分発行